

『チエマダン』特別号 巻頭言

電子ジャーナル『チエマダン』は、二〇二二年二月二四日のロシア政府によるウクライナ侵攻を受けて、特別号を発行します。およそ七年ぶりの刊行です。

侵攻開始から三ヶ月が経過した五月末現在、依然として収束の道筋は見えていません。この間、日本国内においても、様々な情報が膨大に生み出され、そして消費されてきました。その情報は、いつしか個別性を失い、漠然としたイメージへと溶解してはいないでしょうか。人文学の役割が、大きなイメージを前に、いちど立ち止まり、思考することだとしたら、ここに集められた文章をそのための素材として位置付けたい。それは、一面的な「イデオロギー」を標榜するものではありません。本号は、あくまでもロシアの（複数の）文化を捉え直すこと、その複雑性を文字としてとどめ、一つの記録として残していくことを目的としています。

ここに寄稿している日本人執筆者の多くはロシア文化研究者で、アンケートを配布した友人たちもロシア人です。そのため、必然的に「ロシア」が中心になっています。しかし、「ロシア」とは为什么呢。「ロシア文化」とは为什么呢。本号を通して、「ウクライナ対ロシア」という図式に絡め取られがちな言説に抗い、そこにある「国家対国家」ではなく、「国家的イメージ対個々の人間・運動」の姿を描き出し、「文化」の多層性・多様性への理解がわずかなりとも更新されることを願っています。

だからこそ、私たちの小さな『旅行靴』^{チェマダン}でもって「ロシア人の実態」を示しているつもりはありません。むしろ、日本人寄稿者たちの文章、アンケートに答えてくれたロシア人たちの言葉、ゴラーリクスの文章に出てくるそれぞれの「N」たち、いずれも個別的なものであり、たとえ仮名であろうとも匿名であろうとも、そこには個人がいます。翻つて政治的な言説に、プーチンの言葉に、個人の顔は見えてくるでしょうか。

かつて、八年前のクリミア侵攻の際、ロシア人の友人と話していて「君のアイデンティティは何？」と訊いたことがあります。彼は「僕のアイデンティティは、○○○・○○○という名前の人間ということ、たぶんそれがすべてなんだ」と答えました。私たちが手を携えるべきは、こうした個人であり、耳を傾けるべきは彼らの言葉ではないでしょうか。私やあなたや彼や彼女は、あのことやこのことやそのことは、ウクライナで、ロシアで、日本で、個別的に存在しています。だからこそ、今回ロシア人の友人たちがアンケートに対してリスクを負いつつ返答してくれたその意味を真剣に考えなければならぬと考えています。その経験を私たちは読者の方々と共有したいと考えています。

最後に、日本人の寄稿者の方々、アンケートに回答してくれたロシア人の方々、翻訳の掲載を快諾してくれたアルテミー・マグーン氏とリノール・ゴラーリク氏に心より感謝を申し上げます。

願いが無力であることは、この間、幾度となく思い知らされてきました。それでも、被害にあつたウクライナの人々に想いを寄せるとともに、ウクライナに一刻も早く尊厳ある平穏が訪れることを心より願わずにはいられません。